

平成 30 年度 禅ブランディング事業 自己点検・評価結果を踏まえた  
外部評価委員による検証・評価シート

禅ブランディング事業 外部評価委員

氏名 西田正法 ㊞

| (1) 事業全体に対する評価  |
|---|
| 当該事業の適切性・妥当性について  |
| <p>4項目に纏められた「事業の目的」を拝見し、禅研究の最先端にあることを自負する駒澤大学が、全学体制で『禅と心』をテーマとして学際的国際的拠点づくりを目指すことは、時代に即応した適切性・妥当性を有する勝れた事業であると思う。</p> <p>今や禅は、一宗一派を超えて ZEN として世界的な広がりを呈している。斯かる情勢の中、学問の府としての駒澤大学が、深い研究に裏打ちされた正しい禅を広く社会に発信することは、時代の要請とも言えよう。5チームの密接な相互協力の上に、「何を」「誰に」「どのように伝えるか」を明確にし、混迷の時代に一石を投じて頂くことを期待する。</p>                          |
| 当該事業による目的の実現可能性について   |
| <p>目的実現の可能性は実に高いと言えよう。本事業は、駒澤大学にとって決して0からの出発ではない。特に、〈源流研究〉〈受容と展開研究〉〈人の体と心研究〉の各チームにおいては、永年に亘る研究の経験と実績がある。目的とする、〈1、「心」の問題に対する新たな提言、2、領域を超えた新たな研究視座の獲得、3、最先端の機器を用いた科学的検証、4、混迷の一途をたどる国内外に向けた発信〉の実現は、現代社会を正確に捉えどう分析するかにかかっているのではないだろうか。全学的体制の上で為される本事業が、学部や研究者間の壁を超え、現代社会の把握と分析において確かな結果を出すこと、それ自体が現代社会への大きな提言になるのではないか。</p> |
| (2) 受容と展開チームの事業評価   |
| 当該事業の適切性・妥当性について  |
| <p>学問の領域外で、禅を信仰実践とする者にとって宗学の現状は、宗学者の宗学者による宗学者のための宗学の感があるが、本チームが事業内容としているところは、禅学の本筋を押さえつつ日本文化に融合した禅にも視野を広げていることに興味を感じる。『新纂禅籍目録』のデータベース作成による所蔵禅籍の紹介は、情報公開が時流である現代社会にあって重要な事業であろう。</p> <p>禅文化歴史博物館との共催で実施されている坐禅会は、現代人を知る貴重な機会だと思う。</p>  |
| 当該事業による目的の実現可能性について   |
| <p>目的に沿って着実に事業を推進していることを感じる。〈自己点検・評価〉の③④として「年初計画になかった催し物が頻繁にあり、研究活動を行う余裕がなかった」との反省があったが、研究色が際立つ本チームが、源流チームと協力しあいイベントやシンポジウムを実施し、社会に資することは、禅ブランディング事業として大事なことであると評価したい。</p> <p>○将来に向けた発展方策を拝見し、母校駒澤大学が広く社会に寄与することになるであろうことに、喜びを感じる。</p>  |

| (3) 源流チームの事業評価      |   |
|---------------------|---|
| 当該事業の適切性・妥当性について    | 「家風」との名のもと坐禅の指導は様々であり、境涯から語られる禅も玉石混交である。禅が世界に伝播する現代、禅研究において世界に冠たる駒澤大学が、禅の源流から伝播の歴史とその展開を明かし、道元禅師の正伝の仏法・祇管打坐を、信仰信心とは一線を画した客観的・学問的正統性の上に世界に発信することは、駒澤大学にとって適切性・妥当性を有するのみならず、社会的責任と言えよう。 |
| 当該事業による目的の実現可能性について | 源流チームも永年の研究成果を有しており、これまでの研究成果に本事業の目的とする新たな光を当てることが主要な研究課題となろう。時代が求める要求に応える当該事業の実現可能性は高く当然であり、着実に歩を進めているように思う。<br>家風や口伝、境涯という私的で感性的であった禅を、公的で理性的な確かな情報として世に提示することは、駒澤大学の使命ではなかろうか。     |

| (4) 人の体と心チームの事業評価   |   |
|---------------------|---|
| 当該事業の適切性・妥当性について    | 駒澤大学の心理学部で坐禅を科学的に検証しようと試みた歴史は、40年以上前に遡ることができ、研究成果も蓄積していることと思う。しかし、当該事業の難しさはその被験者が希少であるという現実であろう。被験者が希少であるという点に、現代の曹洞宗が抱える深刻な問題がある。それは、確かな坐禅指導がなされていないということ。各坐禅会において祇管打坐は、客観的正当性を検証されることがなかった。本事業の適切性・妥当性は、曖昧になっている坐禅を客観的に検証する可能性を有していることにあると思う。 |
| 当該事業による目的の実現可能性について | 素人では、最先端機器による坐禅の検証がどこまで可能なかは分からない。また、上記で述べたように研究の成果は被験者に大きく左右されるであろう。また、当該事業は、本来無所得無所悟として行ずべき坐禅を、結果を求める有所得的なものにしてしまう可能性を含むことを承知して戴きたい。その上で当事業の可能性を図るには、道元禅師の祇管打坐を確かに説き得、坐ることができる藤田一照師に被験者を依頼すべきであると思う。重複するが、本事業の目的実現の可能性は被験者次第である。              |

| (5) 現代社会チームの事業評価 |  |
|------------------|--|
| 当該事業の適切性・妥当性について | 活動報告の、①視察PJでは、現代的活動を展開する「向源2018」や「新勝寺：禅と庭のミュージアム」の視察や取材の実施、②学際研究PJでは各先生方の研究報告やゲストを招聘してのセミナーの開催、また、フォーラムPJでは「経営組織と禅・マインドフルネス」をテーマとしたフォーラムを開催し、成果を上げている様子を知ることができた。<br>さて、現代社会チームが負う適切性・妥当性は非常に大きいと思う。それは、駒澤大学の禅ブランディング事業が、ブランディングとして広く認知される為の具体的社会性を最も強く担うチームだからである。現代社会チームが「●5カ年の事業内容・目標」に掲げる3項目で、 |

特に現代社会が研究に注目し、その成果に期待を寄せているのは、③の「禅 (ZEN) の観点から、現代人が抱えている心や社会制度の問題に提言をすることに関わる研究を個々人が進める。」との目標であろう。勿論、目標の②に期待を寄せる事業家や経営者もあり注目される場所であるが、その裾野を考慮する時、目標③のブランディング効果は大きく、適切性・妥当性について更に踏み込んで頂きたいと思う。前に上げた目標③の末尾に「研究を個々人が進める」とあったが、前述したように特に社会性を強く求められる当該チームの事業・研究こそ、相互の情報交換と意見交換が必要なのではないか。

本禅ブランディング事業は、全学体制での取り組みを公言しているものであり、このチームが社会から求められる研究成果を考慮すると、文学部の社会学科社会学専攻・同科社会福祉学専攻の招聘や〈人の体と心研究チーム〉との連携もあって然るべきではなかろうか。目標の③に適う研究を共同研究として進めて下さることを期待する。例えば、昨今盛んになってきた身体に障害を有する方々の社会参加を考慮し、社会福祉学専攻の立場から、足を組まなければならない坐禅を椅子坐禅にした場合の身心に変化はどうかを、心理学科の協力と〈人の体と心研究チーム〉との連携で、足を組むことが不可能な方の為の椅子坐禅を提言することは、〈禅と現代社会研究チーム〉ならではの研究テーマと言えよう。

また、活動報告の①視察PJにあった(1)の「向源 2018 参加」や「新勝寺：「禅と庭のミュージアム」は、成る程現代的であるが、禅や仏教を商品化しているようにも感じられ、マスコミの喜びそうな情報ではある。しかし、曹洞宗の学問的本山とも言え、禅研究の最高峰としての駒澤大学としては、人目を引く現代的なものばかりではなく、禅の本筋を行く根底に禅がある確かな活動に注目して頂ければ有り難い。

例えば、恐山菩提院の院代南直哉師は、禅の立場から多くの著書を世に出し、『超越と実存―「無常」をめぐる仏教史』(新潮社)では 2018 年の小林秀雄賞を受賞された。現代の知識人が認めた正に現代社会の禅の提言者である。南師を取材することは現代社会チームの適切性・妥当性を飛躍させることに繋がると思う。

#### 当該事業による目的の実現可能性について

現代社会チームも、掲げた目標に沿って着実に事業・研究を進めている。目的の実現可能性に全く問題はないと思う。だからこそ、この期に及んでの感は免れないことを知りつつの、適切性・妥当性での提言であったことをご理解願いたい。

現代社会チームだからこそ、社会性を具現した共同研究で成果を上げ目的を実現して下さることで禅ブランディング事業の評価が高まると思う。

#### (6) 発信事業チームの評価

#### 当該事業の適切性・妥当性について

現代社会での評価は、何と言っても情報の発信力が鍵となる。本禅ブランディング事業が社会に果たす役割は大きい。その研究成果や活動を広く世に発信し、世界的に求められている禅を偏りのない学問的客観的立場から、安心して受容出来る情報として発信することと、インターネットにより禅の無関心層にアプローチできることは、適切性・妥当性を大いに有する必要不可欠なものである。

|   |
|---|
| 当該事業による目的の実現可能性について   |
| <p>「発信事業チーム」事業は、4研究チームの研究成果や活動にかかっている。4研究チームの事業を理解し、情報を共有し、社会に対する有意義な情報をWEBサイトの活用によって速やかに発信することは、発信事業チームが本事業に対して情熱をもって参加しているなら、掲げた目的の実現に全く支障はないであろう。</p>  |
| (7) 事務部門の事業評価   |
| 当該事業の適切性・妥当性について  |
| <p>本禅ブランディング事業の成功の鍵を握るのは、事務部門の統括力にかかっているのではない。個人研究色が強い大学という場における本事業は、各チームの相互理解と情報の共有、研究協力、イベント開催協力等々、全体5チームにはなっていない、全学体制で進めなければ大きな成功は得られないだろう。定期的チームリーダー連絡会の開催をはじめとする横の繋がり、発信チームのサポート、大学ホームページへのニュースリリースやプレス対応という社会性、その他、目標に掲げる④⑤は事業を円滑に推進するに重要な役割を担っており、⑥の禅センター（仮称）の設置は、駒澤大学が社会から求められている開かれた大学への大事な事業となる。</p> <p>当該事業の適切性・妥当性は実に大きい。</p> |
| 当該事業による目的の実現可能性について   |
| <p>事務部門は、各チームが円滑に事業を推進するには無くてはならないものであるが、それだけで日の当たらない当に縁の下の力持ち的存在である。煩瑣な事務仕事、各チーム間の都合や予定の調整と、ストレスを多く抱えることになる部署であると思う。</p> <p>だからこそ、本事業の必要性・有意義性を誰よりも深く理解し、高く理想を掲げながら精励して頂くことで、目的を実現して頂きたい。</p>  |

|  |
|--|
| その他、要望や改善が望まれる事項について   |
| <p>「禅と現代社会研究チーム」について言及したが、禅の研究機関として有名な駒澤大学が「禅と現代社会」とのテーマを掲げた時、社会がイメージし期待するものを考慮して頂きたい。本年度、改めて目標に目を通し、活動報告を拝見してみて、当該チームに対して物足りなさを感じた。</p> <p>次に、禅ブランディングとして打って出た駒澤大学ではあるが、学内に一步入ったところから禅を感じる事が出来るだろうか。昨年の当項目には、「禅を核とした独自性ある教育機関として学生が変わること」を記したが、本年は、「人生の道しるべ」設置を提案したい。</p> <p>これは、元長崎大学名誉教授の小松正幸先生が私財を投げ打って開設された教育休暇村「月光の里」の各所に設けられたものであるが、学生が生きる指標や悩み解決のヒントになるような、禅語や釈尊の教えを記した「人生の道しるべ」を学内の各所に設置するものである。学内に一步足を踏み入れただけで具体的に見て取れる、他大学にない教育環境作りも手掛けて頂きたい。</p> |

平成 30 年度 禅ブランディング事業 自己点検・評価結果を踏まえた  
外部評価委員による検証・評価シート

禅ブランディング事業 外部評価委員

氏名 趙 佑鎮



| (1) 事業全体に対する評価  |
|---|
| 当該事業の適切性・妥当性について  |
| <p>禅 (ZEN) の思想的研究を基礎とした現代人が抱える「心」の問題に対する新たな提言。<br/>禅 (ZEN) の研究を、超領域的に行うことを通した、新たな視座の獲得。<br/>禅 (ZEN) 思想の根幹である「坐禅」が身心に与える影響の科学的検証。<br/>上記を総合的に結んだ研究の成果を、混迷の一途をたどる国内外に向けて発信する取組は、『禅と心』研究の学際的国際的拠点づくりとブランド化事業に向け、駒澤大学における既存研究の蓄積をさらに深化させ、また新たな視点を取り入れ進化していくことにより、駒澤大学をより一層発展させるための駒澤ブランドを明確にする事業足り得るものであり、その適切性・妥当性について高く評価する。</p> <p>去年より一歩進んだかたちで、学内諸部署と各研究チームにおける連携を図っている点が最も肯定的影響を学内に及ぼしていると推察するものである。課題としては、本来この指摘は事業最終年度で行うレベルのものであるが、この事業によるブランドアイデンティティが学生の意識にどのように変化をもたらしたかをより明確にすることであろう。</p> |
| 当該事業による目的の実現可能性について   |
| <p>禅ブランディング事業 5 ヵ年計画の 3 年目となり、<br/>駒澤ブランドとして、<br/>オリンピックを目途とした禅 (ZEN) の世界的評価<br/>禅 (ZEN) 教育の企業経営への応用<br/>禅 (ZEN) による学生のアイデンティティ<br/>の確立に向けて、チーム毎の研究内容も蓄積され、関係部門との連携による活発な勉強会・研究会が多数開催され、より深まりと広がりが見えている。また、シンポジウムやウェブサイト、インスタグラム等により研究事業が的確に発信されており、目的の実現に非常に期待が持てる。</p>  |

| (2) 受容と展開チームの事業評価   |
|---|
| 当該事業の適切性・妥当性について  |
| <p>禅の日本社会への受容に関する研究については、禅が日本社会に及ぼした影響を踏まえ、影響の拡大をはかるべき道を模索する研究は、非常に意義があり適切かつ妥当である。</p> <p>当該チームの研究蓄積によるコンテンツは、源流研究チームと同様に、今後の国際シンポジウム・交流における、理論的ベースを提供するという意味でも意義深いと思われる。これらの</p> |

研究は専門性の高いものではあるものの、一般大衆に向けた、わかりやすい禅語解説や、禅僧の人間の魅力やストーリーがわかるコンテンツ作成に向けて少しでも工夫がされるならば、さらに好ましいと思われる。

当該事業による目的の実現可能性について

研究に必要となるデータベースの作成作業が着実に進行しており、さらなる充実に向けた調査等が次年度に行われることが期待され、目的の実現可能性が高いと評価する。

### (3) 源流チームの事業評価

当該事業の適切性・妥当性について

禅ブランディング事業において、曹洞禅の源流の研究は、本事業の基幹となるべき研究であり、土台となるものである。新しい視点を積み上げる際に歴史を知ることの重要性は言うまでもなく、非常に適切かつ妥当である。

2018年度活動報告における当該チームの催した各種の会は、質量共に充実したものと評価する。

当該事業による目的の実現可能性について

全国に広まった歴史と思想を研究するべく、重要な歴史的文献研究をおこないながら、『禅の国際化』講演会、連続講座「禅の歴史」、「禅をきく会」、『禅と心』シンポジウム、「臘八坐禅」を開催し、実績を積み上げた。

『禅の国際化』事例の紹介、鏡島元隆博士「禅学概論講義ノート」のWeb公開を継続し、駒澤大学の建学の理念を講義する全学共通の必修科目「仏教と人間」の参考書として活用を目指すなど、十分な成果が期待できる。

大学アイデンティティの大本ともいえる、源流チームの諸々の研究含意が、少しでも多く学生に伝わり理解できるのであれば、学生の人格と歴史観の涵養に大いに貢献するものと思われる。

### (4) 人の体と心チームの事業評価

当該事業の適切性・妥当性について

「禅」の世界的な注目から、現代社会に潜む「心の問題」に焦点を当て、またそれを印象論ではなく、実際の坐禅体験や脳波測定や、MRIを活用した科学的な解明に踏み込む研究として、非常に適切であり妥当である。

当該事業による目的の実現可能性について

禅の心理学的側面研究では、文献研究の成果をシンポジウムと禅ブランディングHPを通じて公表し、意義や駒澤大学独自分野として確立した禅心理学の研究成果を報告。統計学的研究では、禅の影響を坐禅、ランダム化比較実験、統計分析について学生に伝えた。『禅と心』シンポジウムを開催。ファンクショナルMRI法による脳機能解析の研究は、坐禅の効果について統計的に有意な結果は厳密性が求められるゆえに直ちには検出されなかったものの、一歩ずつその成果を積み上げている点は高く評価したい。

これらの活動により目的実現は十分に期待できる。一般大衆としては、諸研究チームの成果

のなかで、最も好奇心と生活上の価値を身近に感じられるところだけに、今後の一般大衆に向けたマーケティング上の大いなる工夫が重要と思われる。

#### (5) 現代社会チームの事業評価

##### 当該事業の適切性・妥当性について

禅（ZEN）と社会制度の研究は、今日的な禅の世界的な流行、およびその応用として企業や医療、健康などの分野に広く広まっていることについて、各々の専門分野の関心から紐解くことは、現代人が抱える心や社会制度の問題への提言として、非常に適切であり妥当である。

現代社会の歪みと不条理を、禅と社会科学的方法論の融合で解明解決することを最終目的とする当該研究チームの志を、当該事業の適切性・妥当性と関連して高く評価したい。

##### 当該事業による目的の実現可能性について

「禅と経営のネットリサーチ」では企業の創業者、役員、管理職を対象に、坐禅やマインドフルネスの実施状況と経営の状況を質問するネットリサーチを実施し、1,500 のサンプルを獲得し、このデータの分析結果に大いに期待する。また各種の視察 PJ、学際研究 PJ、フォーラム PJ、出版 PJ による多くの活動成果があり、目的実現は十分に期待できる。

当該チームの「今後の計画」の報告中に「禅ブランディング事業において、そのターゲットは学生としながらも、これまでのイベントへの参加状況が低い」と、シビアに課題指摘がされているだけに、この点に注力することで、目的が達成されることをぜひ願っている。

#### (6) 発信事業チームの評価

##### 当該事業の適切性・妥当性について

禅の情報発信というまさにブランディングを WEB サイトや様々な企画により、的確に鋭く発信をすることは、非常に重要であり、適切かつ妥当である。

##### 当該事業による目的の実現可能性について

- ① 禅ブランディング WEB サイト、インスタグラムの開設
- ② 禅ブランディングのステッカー、ポスター、クリアファイル、タペストリー、マルチトートバック製作
- ③ 禅ブランディング 「駒澤大学×ZEN 対談」企画  
    <第一弾> 長谷部学長×萩本欽一氏、  
    <第二弾> 角田先生×有田秀穂氏  
    <第三弾> 村松先生×安西 智氏

など、WEB サイトを中心に各種広報ツールを制作し、積極的な情報発信・広報が展開されている。また、インスタグラムや対談企画は、無関心層へのわかりやすい発信として、非常に有益であり、目的実現は十分に期待できる。学生を中心とした無関心層への訴求と訪日外国人への情報発信に力を入れることは、駒澤大学のブランドアイデンティティ確立に向けた重要な一里塚と思われる。

(7) 事務部門の事業評価

当該事業の適切性・妥当性について

本事業を円滑に遂行し、成果をあげるべく、連絡会・プレス対応や各種サポートについて関係各所と連携し、適切かつ確実に運営する体制が整備されている。

当該事業による目的の実現可能性について

連絡会の運営、各種サポート業務、事務作業が、しっかりした体制で業務遂行されており、目的実現が期待できる。

その他、要望や改善が望まれる事項について

私立大学研究ブランディング事業支援期間は、2019年度までとなり、当初の5か年計画の見直しが必要となるが、支援期間最終年度となる次年度の総括に期待するとともに、是非引き続きの事業の継続を大いに望むところである。